

大東文化歴史資料館だより

第6号 2009. 5. 31

漢字と姓・名（諱）・字について

元大東文化大学教授 萩庭 勇



漢字は言うまでもなく、元来は外国のものであった。平たく言えば儻來物（到来物）であった。否そうではなく有意識的に将来されたと言うべきかも知れない。いずれにしても奈良朝以来、勿論初めは特殊な人のみが使い、徐々に自家薬籠中のものとなったのが漢字である。今日では日本人の大多数がこれは外国のものだったなどと意識する者はない。

①漢字の性質：漢字は、これに係る多くの文献が「表意文字」或いは「表意語」と規定している。このこと自体は正しい。が問題は実体にある？殊に歴史的事実の考覈となると簡単ではない。先人の卓見を記めると「古代の研究には漢字の原義と延長義の知識が無ければならない」と。それは時には原義もあり、延長義（引申義）の場合があるからである。其れにも増して複雑なのは借用義（仮借）が使われるからである。例えば漢代の巨人董仲舒に係る「下馬陵」は「蝦蟇陵」とも表記される。前者に視点を置けば「馬より下る」であり、後者であれば「ガマ」の意となる。これは代表的仮借の例である。

②姓名についてこの二字は、今日では日本人の専用物の感さえあるが、その原型は中国（本来は秦旦と言うべし）の専有物であった。秦旦では紀元前数千年の以前から姓名は使用され悠久の歴史があるのに対し、日本は明治の初めにやっと政府が発令した「平民苗字許可令」に始まるのである。従って両者の差異から次のような特徴が見えるのである。それは十三億の中国の姓の数が僅か一万有余に対して日本の数は三十万（採録は27万）とのことである。これは中国のそれは徐々に発展（伸長）したのに対し、日本は一気呵成に成立（付けられて）したためである。

③姓字について：この字は今日では男女双方に使用されるが、元来は女性の出自を表した字である。男性に対してはどのように表記したかについて、中日いずれの学者もその言葉を見していない。が管見を敢えて述べれば「生」字ではないかと！？それに中国では女性は姓のみを名乗ったから、言葉を換えれば「父方の姓」を意味したかも！？要するに元来中国では男性は「姓」も「名」も所有したが、女性は「姓」のみを名乗り且つ結婚後もその姓は変わらなかったのである。両者の間に生まれた子供は父親の姓を名乗り、母親は一人ぼっちだったのである。これに対し日本人（歴史的人物はその限りに非ず）は「名」のみを使用したのである。また結婚後は改姓が常識であった。頃者別姓の二字が新聞などに踊るがはたして成長開花するかどうか！？

④名（諱）について：この字は単純・明白であるが其の原義は明白でない！？勿論常識としては子どもでも没問題である。そこでそれを解く鍵は（ ）内の諱字と並べるとその意味が浮上するのである。この字は名の外に存在するかの如く認識される嫌いがあるが、その實「名」と同位なのである。つまり「忌むもの」なのである。結論を急げば名は自分だけが発音するもの！？平たく言えば「呼び捨てにして良いもの」の意に他ならないのである。逆に言えば他人は呼び捨てにしてはいけないのである。表記に敬語が伴うのはその意味である！？

⑤字（当名）について：当名これは（あざな・あだな）と読む。今日では（あだな）は耳にするが、（あざな）は普遍性の無い字である！？が古く中国では否！日本でも多用された一字であった。史記に「孔子・名は丘、字は仲尼」とは殊の外有名である。前に（当名）と書いたがこれは「名と同位」の意味である。が両者は、同意（同位）ではあるが視点に差異があるのである。名は（前述同様）自分が口にするに対して、字は他人が口にするのである。自分が口にしてはいけないのである。つまり「私の字は」などとは発声しないのが原型である。允に其の中（當）を執るべきなのである。

大東アーカイブス 第7回 企画展

大東文化学院創設をめぐる人々(Ⅲ)

～大東文化学院初代総長・平沼騏一郎～

展示期間：平成21年4月6日(月)～平成21年9月30日(水)

(開室時間 毎週月～金曜日 9:00～17:00)

展示場所：大東文化歴史資料館 展示室(板橋校舎2号館1階)



現在、「創設期の指導者群像」シリーズの第3弾として平沼騏一郎展を開催しています。大東文化学院の発足を促した初代総長・平沼騏一郎をとりあげ、騏一郎の学問観の基礎を築いた故郷津山や無窮会活動の関係等から大東文化学院設立の過程を辿ります。

平沼 騏一郎 [1867(慶應3)年9月28日～1952(昭和27)年8月22日]

大東文化学院初代総長、大東文化協会第3代会頭。明治から昭和前期にかけて活躍した司法官、政治家。第35代内閣総理大臣。号は機外。美作国津山(現在の岡山県津山市)に下級藩士平沼晋の次男として生まれた。早稲田大学学長をつとめた経済史学者で法学博士の平沼淑郎は実兄である。

1872(明治5)年、まだ幼少の頃に家族とともに東京へ上京した騏一郎は、津山藩出身の宇田川興斎や箕作秋坪(三叉学舎を設立)について漢学、英学、算術を学んだ。その後、1878(明治11)年東京大学予備門に入学、1883(明治16)年東京大学法学部へ入学し、1888(明治21)年帝国大学法科大学を首席で卒業した。同年、司法省参事官試補として民事局に勤務することとなり、以後は各地の裁判所で判事試補を、東京控訴院において検事をつとめ、その功績により法学博士の称号を与えられた。1912(大正元)年、検事総長に補せられ、以後約10年にわたりシーメンス事件や大浦内相事件、八幡製鉄所事件などを取り扱った。1923(大正12)年、第2次山本内閣の司法大臣に就任。翌年1月に貴族院議員に勅撰されたが、翌月枢密顧問官に任じられ、1936(昭和11)年には枢密院議長に就任した。また1925(大正15)年に男爵を授けられた。1939(昭和14)年1月、近衛文麿内閣を引き継ぐ形で内閣を組織。しかし世界情勢の悪化にともなう国際環境の緊張や国内対立勢力の調停等に苦慮し、わずか8ヶ月で総辞職となった。1940(昭和15)年12月に第2次近衛内閣の内務大臣に就任、引き続き第3次近衛内閣では国務大臣として留任した。

総じて法曹界を中心として広く官僚、枢密院の中であって影響力のある存在と目された。敗戦後には東京裁判においてA級戦犯で訴追され、終身禁錮の判決を受けた。1952(昭和27)年に病气により仮釈放となり、同年8月22日死去した。

◆ 騏一郎と大東文化学院

騏一郎は、1924(大正13)年1月の大東文化学院開設とともに初代総長に就任し、1925(大正14)年1月までその職にあった。また、学院開設以前の学院綱領並学則編制委員会の委員となり学院方針の決定に携わるとともに、学科課程制定委員長として学科編成の任も負った。

1924(大正13)年1月11日に行われた第一回始業式において、「二千年来皇道を輔翼し我国体に醇化せる儒学を振興し普及するを以て眼目とし、学則に於ては特に皇学の一科を設けて其の標的を明にせり」と学院創設の目的を述べた。これを「究極の目的」と位置づけた騏一郎は、それらを担当する教授陣を「孰れも各学派の泰斗にして当代の碩学大儒なれば、諸子は研鑽の功を積み他日其の蘊奥を究むるの階梯を成すに於て万遺憾なかるべし」として、錚々たる教授陣による最高の漢学教育機関であることを示唆した。

大東文化学院草創期の教授陣には、多くの著名な学者が名を連ねた。第2代総長となる井上哲次郎が哲学を担当したことをはじめ、法学の鶴澤總明、山岡萬之助、漢学の松平康國、牧野謙次郎、内田周平のほか、哲学者北吟吉も論理・心理学を講じている。また、騏一郎の実兄淑郎も開設時から大東文化学院の経済学教授として教鞭をとった。こうした官学私学の出身を問わず、その道での第一人者であった学者たちが挙って教授陣として名を連ねることが実現したのは、騏一郎の広い人脈に寄るところも大きかったと考えられる。

わずか1年の総長在任期間ではあったが、「平沼先生の教育方針」を尊重する声はその後長く聞かれ、大東文化学院の教育の基盤となった。



壇上の騏一郎(大東文化学院開院式)

◆ 騏一郎の学問観と無窮会

国学者井上頼国が遺した蔵書類3万5千冊余を騏一郎が自費により一括購入し、それに騏一郎自身が収集した蔵書をあわせて1915(大正4)年に創設したのが「無窮会」である。

騏一郎の抱いた中心思想の一つに、日本古来の伝統的文化や学問観を優れたものとして重きを置く、日本精神主義、国粹主義的な思想があった。それらは国本社の主宰や修養団の活動に代表される。東洋の道德学術の究明・振興を目的とした無窮会は、そうした騏一郎の復古的思想を一面的に反映したものであり、漢学の素養だけでなく洋学を含めた幅広い教養を持つ各界の錚々たる同志たちが名を連ねた。以降、和漢図書の蒐集、国典・漢籍に関する専門図書館、東洋学術における専門の人材育成を目指す東洋文化研究所、国史・国学・儒学などの諸古典ならびにその歴史についての研究調査活動、業績の公刊等の諸事業を中心活動としてきた。

無窮会の発足後間もなくして、所属していた知識人たちの中でも騏一郎の学事顧問格であった牧野謙次郎(早稲田大学教授)を中心として漢学復興運動が起された。この運動が後に東洋文化振興提唱へと繋がっていき大東文化協会の設立を促し、衆議院に「漢学復興二閣スル建議案」として3度にわたって提出された皇学・儒学振興の提案がようやく認められるに至って、国庫補助を受けて大東文化学院が開設されることとなるのである。

(大東文化歴史資料館 浅沼薫)

◆ 展示品から 鶴峰と機外

鶴峰平沼淑郎氏（鶴峰は号）と機外平沼騏一郎（機外は号）氏は、三歳違いの兄弟である。

兄の鶴峰は慶應元年（1864）、弟の機外は慶應三年（1867）、共に江戸時代最末期の生まれである。

鶴峰は、東京帝大文学部を卒業後、法學博士となり経済・法律の研究者として學究の道に進み、岡山師範學校教頭や早稲田大學教授等を経た後、第三代早稲田大學學長を務めている。

一方機外は、東京帝大法學部を卒業後やはり法學博士となるが、司法省に入省して検事総長や大審院長等を経た後、政治の世界に轉身して第二代日本大學總長を務めた後、第三十五代内閣總理大臣となっている。

この二人は、大學卒業後の道を各々異にしてはいるが、共に本學の前進大東文化學院に深く関係した因縁残からぬ兄弟であり、共に多くの揮毫や書幅を残している。

まず、本學との関係であるが、機外は言うまでも無く大東文化協會第三代會頭にして大東文化學院初代總長である。

一方兄の鶴峰は、大東文化學院創立期に經濟學や經濟學概論を講じられた學院の教授である。

さて、問題はこの二人の書であるが、「兄弟孰の書が優れているか」などと言う野暮な事は言うまい。この兄弟は、幼少時に共に漢學を教わっており、その見識や教養には、共に深廣なるものが有ると言えよう。

鶴峰は、初め津山の儒者齋藤淡堂に『四書』や『詩經』を学び、上京後更に小石川の廣瀬惟熙に漢學を學んでいる。

一方機外は、五歳で上京後、初め津山藩出身の博物學者にして儒医でもあった宇田川興齋に漢學を学び、次いで備中の儒者菊池文理の次男で津山藩の蘭學者箕作阮甫の婿養子となった箕作秋坪の三叉學舎で、漢學や英語を學んでいる。

鶴峰は、伸びやかな行書で「志高意遠」と有る。この言葉は特に古典と言う譯では無く、物事を譽める時に良く使われる言葉であるが、或いは『三國志』の『魏志』武帝紀に有る「志大而智小」を洒落て振ったものであろうか。

一方機外は、堂々たる楷書で「敬立而内直」の五字を記している。これは言うまでも無く、『易經』文言傳の「敬以直内」から取った言葉である。

學究者の大らかな行書であれ、政治家の厳格な楷書であれ、この兄弟の書は共に筆勢が有り、単に言葉を寫すのではなく、己が心に感知して咀嚼したものを己が言葉として筆に載せており、何處と無く幼時に漢學に接した明治人の、意氣志概を感じさせる筆遣いである様に思えてならない。

（大東文化文学部中国学科教授 中林史朗）



平沼淑郎書幅（中林史朗氏蔵）



平沼騏一郎書幅（中林史朗氏蔵）

学園関係者インタビュー・・・

細川雨村氏と恩師・笠井南村先生の思い出の地を訪ねて

まだ肌寒い3月下旬、長野県上田市に細川雨村（武敏）氏を訪ねた。信州上田ご出身の細川氏は大東文化學院本科（第3部）の第20期生である。

細川氏からは戦時体制下から敗戦直後までの学院における貴重な体験談を長時間にわたりお話をいただいた。旧制上田中学での笠井南村先生との出会いから、その後大東文化學院時代を通して生涯続く、厳しくも心温まる師弟関係の様子を伺うことができた。細川氏の「雨村」の名は、将来を囑望された氏が、土屋竹雨先生（初代大学長）の「雨」と笠井南村先生の「村」とを両先生から直接いただいたものだと言う。戦後の大東文化學院生の生活の基盤となった南村寮を創られた笠井南村先生の、學問に対する厳しい様と実生活における人間味溢れる様とを昨日の事のように生き生きと語られる細川氏が印象的であった。



自宅書齋での細川氏（2009年3月22日）

（大東文化歴史資料館 浅沼薫奈）

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）では、学園関係者インタビューや資料寄贈を随時お願いしています。情報等がございましたらお気軽にご連絡ください。ご協力を宜しくお願いいたします。

・・・追悼・桑原 淳先生を偲んで・・・

桑原先生は、平成20年8月4日、関係の皆様方に惜しまれつつ84歳を一期に永眠されました。先生を偲ぶ拙文を書くにあたり、あらためてご冥福をお祈り申し上げます。

年度が変わった平成21年4月17日、私は、約8ヶ月ぶりに練馬区石神井のご自宅に伺い、ご焼香させていただきました。その折、奥様より先生の生前のお話をお聞きする貴重な機会を得ました。その折の聞き書きなども織り交ぜて書かせていただきます。

伺った日、通された部屋の一隅に、20年8月4日付けで従五位及び瑞寶小綬章の叙位・叙勲を追贈されたことを示す認証状が掲げられているのを目の当たりにし、先生が教育界で果たしてこられた貢献の大なることを、あらためて実感した次第であります。

大正13年、中越地震の被災地で知られた山古志村に程近い所のお生まれと聞きましたが、おもには長野県との県境に位置する新潟県津南町で成長されたとの事です。お父上は当地で医業を営んでおられたそうです。学校時代は、十日町にある旧制十日町中学校（県立十日町高等学校）まで、飯山線で通学。有数の豪雪地帯津南町のこと、降雪期の通学には難儀もさぞかしと、その苦労ほども偲べれます。また当時は、日中戦争に続き欧米列強との戦雲も急を告げる頃であったことも併せ考えると、戦時下、山間の地で青年期を過ごした一青年のありかた、その青春がどのようなものであったのかも興味が引かれます。

先生が大東文化学院に入学されたのは昭和17年4月1日、ご自身でまとめられた履歴を拝見すると、本科国語漢文科2部、昭和19年9月13日卒業となっております。9月13日卒業というのは、いかにも中途半端な日付で、思うに、戦局が退勢に向かい悪化の一途をたどっていた時期でもあり、繰り上げ卒業の措置が取られたためと推測されます。私事で恐縮ですが、桑原先生が本校で校長をされていたある日、校長室へ呼ばれたことがありました。本題の用件は忘れましたが、その折、先生が私の父のことを話題にされました。それは、先生が大東文化学院在学中のことで、父が軍事教練の教官として本学に来て、教練でしごかれたというものでした。私の父も大東文化学院本科6期、高等科19期の卒業生です。この時、父は応召の陸軍大尉として学院での軍事教練を担当したので、先生との出会いがあったということだと思われまます。戦争当時ならではのお話でありました。

学院卒業後は、東洋大学文学部を出られ、昭和22年から27年まで、郷里の小千谷旧制中学校、母校十日町高校で教鞭を取られ、その後上京、都立高校の教員採用に合格し、昭和51年、都立板橋高校教頭、57年、同四谷商業高校校長を経て、60年4月から本校副校長として赴任、63年から平成3年3月の定年まで校長として勤務されました。民謡や短歌など趣味人としても幅広く、勤務した学校の生徒からも慕われ、幾組もの仲間も引き受けられたと聞きました。先生は折に触れて「教員の道を選んでよかった」とおっしゃっておられたということを奥様から何うに付けても、そのお人柄が偲べれます。

(大東文化大学第一高等学校・校長 安生 高明)

【大東アーカイブス活動記録】(2008年10月～2009年3月)

- | | |
|---|--|
| 10. 2 企画展入替作業 | 1. 22 全国大学史資料協議会東日本部会幹事校会・研究会参加
(於：武蔵野美術大学) |
| 10. 6 第6回企画展「大木遠吉と大東文化協会」公開 | 1. 24 自校教育シンポジウム参加(於：立教大学) |
| 10. 9 全国大学史資料協議会全国大会参加
(於：琉球大学及沖縄県立文書館、～11日) | 1. 31 「大学アーカイブスに関する研究会」参加(於：京都大学) |
| 10. 19 財団法人無窮会へ資料調査 | 2. 17 岡山県津山市へ平沼騏一郎関係資料調査(～18日) |
| 11. 22 同志社大学特別展シンポジウム参加(於：同志社大学) | 3. 5 歴史資料館運営委員会 |
| 11. 28 大木吉甫氏本学来校 | 3. 19 全国大学史資料協議会東日本部会幹事校会・研究会参加
(於：武蔵野美術大学) |
| 11. 30 ニュースレター『大東文化歴史資料館だより』vol.5発行 | 3. 21 長野県上田市へ卒業生(細川武敏氏)インタビュー調査
(～22日) |
| 12. 3 「私立大学アーカイブズの未来」講演会参加
(於：早稲田大学) | 3. 30 「キャンパスの変遷」パネル展示室設置 |
| 12. 11 全国大学史資料協議会東日本部会幹事校会・研究会参加
(於：東洋学園大学) | |